日汉对照

日本风情丛书

日本

历史回眸

邱 岭
范闽仙 编著

東方出版中心

日汉对照

日本风情丛书

日本历史回眸

邱　岭
范闽仙　编著

东方出版中心

[illegible]闽仙编著.—上海：东方出

[illegible]丛书）

ISBN 7－[illegible]－3

Ⅰ.日… Ⅱ.①邱…②范… Ⅲ.日语－对照读物－日、汉 Ⅳ.H369.4

中国版本图书馆 CIP 数据核字（2001）第 00350 号

日本历史回眸

出版发行：东方出版中心

地址：上海市仙霞路 335 号

电话：62417400

邮政编码：200336

经销：新华书店上海发行所

印刷：昆山亭林印刷总厂

开本：787×960 毫米 1/32

字数：190 千

印张：10.25 插页：2

印数：5,000

版次：2001 年 2 月第 1 版第 1 次印刷

ISBN 7－80627－648－3/H·69

定价：11.00 元

版权所有，侵权必究。

内 容 提 要

本书是《日本风情丛书》中的一种，以日汉对照的形式，对日本的历史作了简明扼要的回顾，按照时间顺序，上自日本天皇始祖，下至战后日本，包括日本历史发展中的重要人物如圣德太子、织田信长、丰臣秀吉、德川家康以及重要事件如坛之浦之战、承久之乱、应仁之乱、天明大饥荒、关东大地震、英帕尔战役等均有介绍。本书内容充实，基本反映了日本历史的发展概貌，既可供学习日语之用，又可作为了解日本历史的理想读物。

日汉对照·日本风情丛书

《日本国民生活透视》

《日本社会纵览》

《日本风光掠影》

《日本历史回眸》

《日本文学艺术集粹》

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

目　録（目　录）

1. 天皇の先祖 …… 3
天皇始祖 …… 195
2. 邪馬台国 …… 9
邪马台国 …… 198
3. 応神王朝 …… 15
应神王朝 …… 201
4. 蘇我氏の抬頭 …… 21
苏我氏兴起 …… 205
5. 聖徳太子 …… 27
圣德太子 …… 209
6. 大仏開眼 …… 33
大佛开光 …… 213
7. あいつぐ女帝 …… 39
女帝辈出 …… 217
8. 一家三后 …… 45
一家三后 …… 221
9. 忠盛の昇殿 …… 51
忠盛升殿 …… 225
10. 壇ノ浦の戦 …… 56
坛之浦之战 …… 229
11. 承久の乱 …… 62
承久之乱 …… 233

12. 蒙古襲来 …… 68
蒙古入寇 …… 237
13. 後醍醐天皇 …… 74
后醍醐天皇 …… 241
14. 日本国王 …… 79
日本国王 …… 245
15. 応仁の乱 …… 85
应仁之乱 …… 249
16. 織田信長 …… 91
织田信长 …… 253
17. 豊臣秀吉 …… 97
丰臣秀吉 …… 258
18. 徳川家康 …… 103
德川家康 …… 262
19. 島原の乱 …… 109
岛原之乱 …… 266
20. 入り鉄砲出女 …… 115
火枪与女人 …… 270
21. 犬将軍綱吉 …… 121
犬将军纲吉 …… 274
22. 天明の大飢饉 …… 127
天明大饥荒 …… 278
23. 黒船出現 …… 133
黑船事件 …… 282
24. 戊辰戦争 …… 139
戊辰战争 …… 286
25. 文明開化 …… 145

文明开化 …… 290
26. 日露戦争 …… 151
日俄战争 …… 294
27. 関東大震災 …… 157
关东大地震 …… 298
28. 2·26 事件 …… 163
2·26 事件 …… 303
29. インパール作戦 …… 169
英帕尔战役 …… 307
30. 生活意識の本質的変化 …… 175
生活意识的本质改变 …… 311
31. 日本文化への自覚 …… 181
对日本文化的觉醒 …… 315
32. 自由、平等、福祉の新国家建設へ …… 187
建设自由、平等、福利的新国家 …… 320

日 语 原 文

原书空白页

1. 天皇の先祖

伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神は、天つ神一同から漂う国土の修理固成を委任されて、天地の間に架けられた天の浮橋にお立ちになって、天の沼矛を下界にさしおろし、かきまわされるのに、海水をコオロコオロとかき鳴らして、引き上げなさる時に、その矛の先から滴る海水がだんだん積もり固まって島になった。海水がおのずから凝り固まってできた島なので、これを淤能碁呂島というのである。

両神はその島にお降りになって、聖なる御柱をお見立てになり、また結婚のための広い宮殿もお見立てになった。そこで伊邪那岐命が妹の伊邪那美命に尋ねて、「おまえの身体はどのようにできてきたのか」と仰せになると、伊邪那美命は「私の身体はだんだんに成り整ってきましたが、まだ整わないところが一か所あります」とお答えになった。さらに伊邪那岐命が「私の身体はだんだんに成り整ってきたが、できすぎたところが一か所ある。だから、この私の身体の余分なところを、おまえの身体の足りないところに刺し入れふさいで、国を生もうと思う。生むことはどうだろうか」と仰せになると、伊邪那美命は「それは結構でしょう」と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

お答えになった。そこで伊邪那岐命は「それならば、私とおまえとこの聖なる御柱を巡り、出会って、聖なる結婚をしよう」と仰せになった。このように約束してから伊邪那岐命は「おまえは右から巡って会いなさい。私は左から巡って会おう」と仰せられて、約束をし終わって御柱巡りをした時に、伊邪那美命のほうが先に「何とまあ、すばらしい男性でしょう」と唱え、そのあとで伊邪那岐命が「何とまあ、美しい娘だろう」と唱え、おのおの唱え終わったのち、伊邪那岐命がその妹に向かって、「女が男より先に唱えたのはよろしくない」と仰せられた。そうはいいながらも、聖婚の場所である八尋殿において御子を生むことを始めて、生まれた子は水蛭子という不具児であった。この子は葦の船に乗せて流し捨てた。

そこで二柱の神は相談され、「今私たちが生んだ子は、不具児でよろしくない。やはり天つ神のおられる所に参上して、このことを申し上げよう」とおっしゃって、すぐに一緒に高天原に参上し、天つ神の指示を仰がれた。そして天つ神のご命令で鹿の肩の骨を焼いて裂け目の形で神意を知るという占いをした結果、天つ神は「女が先に唱えたのがよくないのだ。再び淤能碁呂島に帰り降って、改めて唱え直しなさい」と仰せられた。そこで両神は帰り降って、また例の天の御柱を前回のように巡られた。今度は伊邪那岐命のほうから先に「何とまあ、美しい娘だろう」と唱え、そのあとで妹の伊

邪那美命が「何とまあ、すばらしい男性でしょう」と唱えた。このように唱え終わって結婚され、その間に生まれた最初の子は淡路島であった。次に四国などを生んで、そして五穀の豊かに実るといろ意の大倭豊秋津島(今の本州)を生んだ。こうした次第で、八つの島を生んだのにちなんで日本列島を大八島国という。

このようにして伊邪那岐、伊邪那美の両神は国を生み終えて、さらに神を生むことになったが、火の神の火之夜芸速男神を生んだために、伊邪那美命はその陰部を焼かれて、とうとうお亡くなりになった。

あとに遺された伊邪那岐命は亡くなった女神の伊邪那美命に会おうと思って、死の国の黄泉国にそのあとを追っていった。そこに到着し、女神が御殿の鎖し戸から出て男神を迎えた時に、伊邪那岐命は話しかけて、「いとしい私の妻の伊邪那美命よ。私とおまえとで作った国はまだ作り終わっていない。だからそれを完成するために現し国に帰ってくれ」と仰せられた。すると、伊邪那美命が答えて申すには、「それは残念なことです、早くここにいらっしゃらないで。私はこの黄泉国の食事をしてしまいました。しかしながら、いとしい私の夫の伊邪那岐命がここにいらっしゃったことはもったいないことです。ですから現し国に帰ろうと思いますので、とりあえず黄泉国の神と相談してきましょう。その間私の姿をごらんなさいます

な」。このように申して女神はその御殿の内に帰っていったが、その間がたいへん長くかかって男神は待ちかねなされた。それで、左の御角髪にさしていた神聖な爪櫛の端の太い歯を一本折り取り、それに一つ火をともしてその内にはいって、ごらんになると、女神の身体には蛆がわき集まって、ころころと音をたてていた。そして頭や胸には恐ろしい大雷や火雷がおり、合わせて八種の雷神が生まれていた。

そこで、伊邪那岐命はこの有様を見て、恐れおののいて黄泉国から逃げ帰ろうとなさると、その女神の伊邪那美命は「よくも私に恥をかかせましたね」と申して、すぐに黄泉国の醜女たちを遣わしてそのあとを追いかけさせた。それを見て伊邪那岐命が黒い御鬘を取って投げ捨てると、たちまち山葡萄の実がなった。これを醜女たちが拾って食べている間に男神は逃げていったが、なおも追いかけてきたので、また右の御角髪にさしていた神聖な爪櫛の歯を折り取って投げ捨てると、たちまち竹の子が生えた。これを醜女たちが抜いて食べている間に男神は逃げのびていった。そしてそのあと、女神は身体から生まれた八種の雷神に大勢の黄泉国の軍勢を従わさせて、男神を追いかけさせた。そこで男神は腰に帯びていた長剣を抜いて、それを後ろ手に振りながら逃げていったが、雷神たちはなおも追いかけてきて、現し国と黄泉国との境の黄泉比良坂の麓に到着した時に、男神はそ

の麓に生えていた桃の実を三箇取って、これを持って投げつけると、みな逃げ帰っていった。そこで伊邪那岐命は追っ手を追い払ってくれた桃の実に、「おまえは、私を助けたように、葦原中国に住むすべての生ある人人が苦しい目にあって悲しみ悩むような時には助けてあげなさいよ」と仰せられ、桃の実に名を賜わって、邪気を祓う偉大な神霊という意の意富加牟豆美命と名づけた。

最後には、その女神の伊邪那美命自身が追ってきた。そこで男神は千人かかってやっと動くくらいの巨大な岩を引っぱってきて、その黄泉比良坂をふさぎ、その岩を間にはさんで、めいめい向かい合って夫婦離別のことばを言い渡した時、伊邪那美命は「いとしい私の夫の伊邪那岐命よ。あなたがこんなことをするならば、私はあなたの住む現し国の者どもを一日に千人も絞り殺しましょう」と申した。これに対して伊邪那岐命は「いとしい私の妻の伊邪那美命よ。おまえがそんなことをするならば、私は一日に千五百もの産屋を建ててやろう」と仰せられた。こういうわけで、この世では一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まれるのである。

このような次第で黄泉国からのがれてきた伊邪那岐命は、「私は何といやな、汚ならしい国に行っていたことだろう。その穢れを清めるため私は身体の禊をしよう」と仰せられ、筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原にお着きになって、禊をして身の穢

れをお祓いなさった。その時も二十二柱の神が生まれたが、黄泉国の穢れを見た左のお目をお洗いなさる時に生まれた神の名は天照大御神で、天にあって照り給う大神との意味である。この神は、自然神としては日の神であり、人格神としては女性の皇祖神で、日本天皇の先祖である。

2. 邪馬台国

原始ゲルマン人の社会や政治の状態が、はじめて文字に記録されたのは、ゲルマン人自身の手によるものではなかった。それは、紀元前1世紀の中ごろ、ローマ帝国の独裁者ユリウス・カエサルの〈ガリア戦記〉や、紀元後98年ごろ、同じローマの帝政時代の創作家ガイウス・タキトゥスの〈ゲルマニア〉によって、初めて記述されたのであった。

これと同じことが、日本人の歴史にもみられる。すなわち、弥生時代には、考古学上の資料は豊富にあるのだが、それだけでは当時の政治や社会の状態はほとんどわからない。ところが、このころ、東アジアの世界でローマ帝国のような地位を占めていたのは、中国の王朝である秦漢帝国であった。そして、この中国の官撰の史書〈前漢書〉に、次のように記されていることによって、初めて文字によって、弥生中期の日本の状態が、簡単ではあるが、正確に記録されたのであった。その記録は、

「夫れ楽浪海中に倭人あり　分れて百余国となり　歳時を以て来たり　献じ見ゆ」というものだが、これは〈前漢書〉のできた時期などから見て、およそ西暦紀元前後の日本の状態を記録したものと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo